



国際ロータリー第 2530 地区 東北第一分区

福島南ロータリークラブ会報

事務局連絡先 024-546-3793



新春特別号② (第 24 回例会分)

2021.1.13



国際ロータリー会長

ホルガー・クナーク Holger Knaack

国際ロータリー第2530地区ガバナー 石黒 秀司

福島南ロータリークラブ 会長 松崎 弘昭

標語「後から来る者の種火となって共に熱く燃えよう」

例会会場連絡先/クーラクーリアンテナパレス TEL 024-523-3811 毎週水曜日 12:30~

◆会長挨拶 松崎 弘昭 会長



皆様、こんにちは、新しい年を迎えてもこのコロナ禍の中にあっては、とても晴れ晴れしい気持ちになれない会員の方も多いことと思います。 クラブ例会も1月4日の臨時理事会、そして13日の第8回理事会での審議の結果、1月度の全例会と2月3日の例会は休会とすることが決定されました。しかし、休会の間、何もしないという選択ではなく、20日(水)と27日(水)には、試験的ではありますが、オンライン例会を実施し、2月10日からは、通常例会とオンライン例会を併用して行く予定です。また、休会中の会報も会員の方々の情報共有ツールの一つとして発行を続けて行きたいと思っております。1月は、まだまだ、山眠る季節ですが、雪の下では動植物が春に備えてすでに準備を始めています。私たちが、このコロナ禍の中で様々な行動は制限されておりますが、先の時代を見据えてしっかりと準備を進めなければならないと思います。美しく咲いている花も時期がくれば深く散ってしまうことを知り、一度だけの人生を丁寧に、気持よく多岐多岐日々を、工夫して楽しく過ごしてみても如何でしょうか。

さて1月は職業奉仕月間です。全国の中小企業は少し古いデータですが、2016.6には357万社あり、25年までに70歳を超える経営者は245万社に達すると言われております。そして、そのうち半数以上の企業は後継者が決まっていなそうです。

事業の承継で悩んで人は多いようです。特に、創業者から2代目への承継は問題です。考えてみると政治家や芸能人の2代目も同じかも知れません。極貧に耐え、幾つもの辛苦を乗り越えた初代はどこの世界でも素晴らしい方が多いようです。しかし、2代目で会社を潰したり、何か事件を起こしてしまったりすることが如何に多いことか、取り上げれば枚挙にいとまがありません。

何故かと考えると、表面的な姿や技術は伝えても、大事な創業の精神を伝えていないのか、若しくは、そもそも、そのようなのは無く一発屋が偶々創業しただけだったのかも知れません。

皆さんも、この月間に因んで自社の後継問題について考えてみては如何でしょうか。



松崎会長のエッセイ 一田舎の食堂に職業奉仕の神髄を見たー

「腹が減ったなあ、飯でも食うか。」その日は、里山の調査で朝から山歩きだった。疲れた体を癒すため、美味い昼飯を食べたいという気持ちになって、車を走らせ、いろいろと探したが、良さそうな店は何故かみんな閉まっている。田舎風の暖簾の掛かっている店が数軒あるだけだった。結局、背に腹はかえられず、あきらめ気分で、その内の一軒の店に入ることになった。

見た目はごく普通の田舎の食堂である。年季の入った暖簾をくぐり中に入ると、「いらっしゃいませ」こんなには」とやさしく丁寧な言葉が飛んできた。店内は、以外にも作業服を着た労働者、初老の単身者、老夫婦などで混み合いを見せていた。座席も三つの小上がりと五つの小さなテーブル席があるだけだ。

案内されて座ったテーブル席から店の奥の厨房が見えた。そこには70歳前後のおばあさんと40歳後半の息子と思われる二人がこの厨房を切り盛りしている。おそらく、心地よい挨拶で迎えてくれた、すらっとした品の良い女性がその息子の奥様なのだろう。

席に着くとすぐに、お茶と水を運んでくれた。生業焼きを注文して、何気なく辺りをみていると、先に来ていた初老の夫婦が食事を終え、会計を済ませようとした。釣銭を渡す女性は、品のある笑顔で「ありがとうございます。」と言った。驚いたのは、その後である。

「家政婦を見た」、いやいや、「ロータリアンを見た」。そのお客さまが、戸を開けて暖簾をくぐろうとしたときだ。店の女性は、心のこもったごく小さめの声で、「ありがとうございます。またお越しください。」と、あたかもキャンペーンアテンダントのように、お躰の上あたりに両手をおいて、深々とお辞儀をしているのだ。当然、そのお客様からは、その女性の姿は見えていない。「見えないところに心をこめる。」正に、これが日本人の感性と言ったところだろうか。

しばらくの間、美味しい定食を堪能した。空腹も満たされ、満足というか、何か清々しい気持ちになれた。そして、さっきの老夫婦と同じように、気持ちの良いやり取りの中で勘定を支払い、帰り戸を開けた時、あの光景が思い出された。暖簾をくぐったあと、何気なく振り返ってみた。やはり、そこには、さっきと同じ光景があった。

夜になるとまた、お腹が空くまたここに来ようかな。」などと考えてしまった。それからというもの、時々店を訪れ、美味しい食事と心地よい気分を味わっている。

そうだ、まさに、このお客様に感謝する気持ち「お陰様」の気持ちがロータリーの職業奉仕の本質なのかもしれない。不思議なのは、対応する女性が清楚で感じが良く、飯も上手い。なのに、行列までできない。でも、何時いつでも7~9割の席は埋まっている。席を確保できないということもないのだ。若しかすると、ここに来る人たちは、この店に満足している人が多いはずだが、それをみんなに教え、広めてしまうと、行列が出来てしまう。そして、食いそれれが起きると思っているのかもしれない。

そうだ、だから私もこのエッセイの中では店のことは紹介して店名は伏せておくことにしよう。おわり

■前米山奨学生 邸 晶晶さんからのお手紙

福島南ロータリークラブの皆様へ

お元気ですか。友達から福島の写真が届きました。やはりきれいですね。雪も、福島も。

帰国もう半年になりました。この半年、また新しい体験ができました。アマゾンでの仕事が楽しいです。私が所属しているチームは今年新しいできたチームだから、みんな同じ年で毎日お互いに勉強しながら仕事を進めています。私も、何もわからない新人から、チーム内様々な役割を果たしながら他人にアドバイスできる先輩になりました。忙しいですが、充実した半年でした。同僚から「ショウショウは明るくていつもやる気満々ですね」、「真面目で頼れる人ですね」と褒めています。

そう言われるとき、いつも福島南ロータリークラブのことを思い出します。やはり皆さまのおかげで、私は今のような人間に成長したのです。ロータリーと出会う前、外国にいる私は自分を外国人に位置付けて、授業料と生活費のために毎日はバイトと勉強に閉じ込め、外の世界に向く時間が無く、内向的になりかけた時期がありました。今思い出すと、あの時はつらいでした。でも、米山奨学生になってから、全部変わりました。福島南クラブの皆様に出会って、皆様のやさしさが私を癒しました。奨学金のおかげで、周りの世界を感じる余裕ができました。例会に参加し、他のクラブや高校インターアクトクラブの例会にも出席させていただき、普段の学校生活で体験できないことを経験してきました。ロータリアンの皆様やほかの国からの奨学生たちと友達になり、自分の視野も広がりました。そうだ、ロータリーの支えで、アメリカに行って、そこにも今でもよく連絡している友達がありました。新型コロナウイルスで帰国できなかったその三ヶ月、他人から見ると大変でしたが、私にとってそれはカウンセラーの鈴木洋子さんと一緒に忘れられない時間を過ごした貴重な三ヶ月でした。

最初には、私は「なんでこの世にはこんなにやさしい人たちがいるだろうか」と疑問しました。その後、皆様と付き合いうちに「奉仕」の意味をだんだん理解しました。奨学生になる収穫は自分の生活が豊かになっただけでなく、大事なものは、ロータリーを通じて、恩返しの大切さや自分の社会的責任感も養うことができたということです。ロータリアンの皆様は私人生の目標です、私も皆さんのような人間になりたいです。

だから帰国しても、このことを忘れずに毎日頑張っています。ロータリーの奨学生になったこと、福島で生活したこと、アメリカに行ったこと、順調に修士学位と取ったこと、皆様に出会ったこと、全部、今の私の誇りです。私の自信の源泉です。

何度も言いましたが、ロータリアンの皆様に感謝を申し上げます。これからもこの感謝の気持ちも忘れずに、ロータリアンの皆様に見習って、人の役に立てるように一生懸命頑張ります。

PS : 会いたいです！❤️コロナが終息するとき、福島で一緒に食事しましょう！！

晶晶 (ショウショウ)



「一昨年12月の女子会(お食事会)、昨年1月のクラブの新年会での晴れ着姿、例会会場で奨学金をもらう晶晶さん」